

日本災害看護学会先遣隊 令和元年台風第 19 号活動報告（長野県）

令和元年 10 月 13 日

活動・報告者：宮越幸代

1. 活動の概要

活動日時：令和元年 10 月 13 日（日）8:00~20:30

活動場所：長野県長野市上駒沢・古里地区

支援目的：先遣隊活動

災害被害の概況：10 月 12 日夜から 13 日未明にかけて東海、関東、東北地方を横断して太平洋上に抜けた台風 19 号が東日本で記録的な大雨をもたらし、長野県北部一帯を流れる千曲川が 13 日未明に決壊、千曲市から長野市、飯山市にかけての北信の千曲川流域に氾濫被害をもたらした。長野市穂保では村山橋下流左岸の堤防が約 70 メートルにわたって決壊、周辺住宅が濁流にのまれ、2 階近くまで浸水した住宅もあった。

活動日の状況：台風 19 号の本土上陸後 2 日目

前夜からの大雨が続き、千曲川沿岸の自治体では前日より大雨特別警報（大雨・洪水警戒レベル 5）が発令、住民に避難を促していたが、決壊前の 13 日午前 3 時 20 分に解除していた。

2. 活動の実際

時間	活動の内容
8:00	千曲川決壊のニュース、地域の防災メールを受けて初動調査の必要性を学会理事小原真理子氏に相談、出動の指示を仰ぐ。被災地域の詳細、全貌がつかめないままに出動する。
9:00	長野県危機管理防災課（県庁西庁舎 3 階）・災害医療調整部（同 303 号）・健康福祉部（本庁 5 階）を訪問、被災地、移動中に起きた被害の変化、概況について情報収集する。医療の統括部門もおおよそ把握する。
10:00	長野市危機管理防災課（中央庁舎 5 階）を訪問、被害の概況、医療調整本部について情報収集、通行止めの国道 18 号線を避け、三才～飯綱町県道ルートでの被災地入りを検討する。決壊した現場に近い地域の医療機関の被害や稼働状況を車窓から確認（朝日病院、各種クリニック等）。移動車輛のラジオニュースで「市内上駒沢 県立総合リハビリテーション・センター」が水没し、患者および職員を残して孤立状態にある情報を入手する。
11:00	上記ルートにおいて、平常時には考えられないほどの渋滞の中、検問等にて立ち入り禁止箇所を避け、県リハに到着。センターの建物を取り囲んで全体が膝上位まで浸水。建物だけが孤立し、階段に職員等が出入りしている様子を確認する。数人の職員が護岸で待機している様子を見

	<p>て、聞き取りを開始。看護師として必要な支援できる旨を話し、職員の一人がセンター内にとどまる総看護師長とセンター長の医師につないでいただく。</p> <p>69名の入院患者のうち、7時頃から後方支援の病院に移送をはじめ、あと40名ほどを残し（うち救急搬送を要する患者は3名）センター内に残されている状態であることを把握。搬送は搬送先と移送手段が確保でき次第、順次、車いす（センター内のみ）、ストレッチャー（浸水部分）でピストン搬送していた。護岸には要請された救急車が到着し、その都度、職員が水没部分を数人でかき分けながら患者と荷物を救急車のついでに護岸まで搬送する形で行った。</p>
11:30	<p>センターから外へストレッチャーで搬送された1名の患者の救急車への乗り込みを支援後、応援に駆け付けた看護師とともに、センター内にストレッチャーで移動、センター内に入り対策本部に向かった。</p> <p>対策本部で停電、非常電源の遮断（電子カルテの機能不全）、固定電話の機能不全、1階部分の浸水による病棟・薬局・検査室・栄養課の機能が全て麻痺、食料は昨夜から準備していた料理と夕食用の弁当があること、飲料水は一人1本程度確保、急いで救急搬送が必要な吸引や医療処置患者はあと3名であること、そのほかの方は後方支援の搬送先を現在、県と連携しながら決定、DMATとともに搬送計画中である情報を得た。充電の範囲内で携帯電話の通話、ガスの供給、上水道は使える状態にあった。</p> <p>患者は昨日12日午後18時ころから1階病棟の患者をすべて2階と3階に移動させていたが、13日5時半ごろから地下から水が湧いてくるような異音に気づき、急遽、院外への搬送を開始していた。</p>
13:00～ 15:00	<p>外部支援の給食の搬入、救急搬送を要する4名の搬送を完了したところで、職員が昼食、その間に他の搬送患者の荷物まとめ、身支度等を支援する。</p>
15:00	<p>リハセンから最も近い古里小学校および古里総合市民センターの避難所を視察。NPO法人Peace Winds Japan(PWJ)より電話にてリハセンの救急搬送支援できるとの申し出を受け、2時間程度後の現地合流を約束する。古里小学校体育館は210名収容のところ、70名ほどが避難中。小学校の医療的ケア時を担当する看護支援員と避難者から聞き取りで情報を収集。自宅が停電し、浸水、血圧降下剤・利尿剤・血糖コントロール剤・狭心症の薬などを家においてしまい、今夜の分もないという問題が散発。体調不良等の訴えはなかった。</p>

	古里総合市民センターでは、血圧降下剤・血糖コントロール剤・抗アレルギー剤を持ってこなかったという訴えがあった。
16:30	水がだいぶ引き、DMAT や PWJ によって搬送が再開されたりハセンに戻り、搬送を支援する。対策本部には一覧表が作成され、患者名と搬送先、手段、サマリーの整備状況等が整理され、県内各地からの救急車の到着も規則的かつ安全に確保されるようになって、順調に残りの 20 名ほどの搬送が進んだ。人 1 人がようやく通れる階段部分は男性職員 4-5 名で車いすごと 1 階に下した。車いすは個人持ちの方もおり、車止めの部分が階段に引っかかるため、その都度外す、車いすを入れ替えるなど、一人を下すのに 20 分程度を要した。階段部分日が落ちるとともに、寒さが強くなり防寒の装備を促し、停電で手元ライトの身を頼りに暗闇で着衣動作をサポートした。不安等を訴える患者はなく、職員も落ち着いて対応できていた。搬送される方々は多くは単身者、在宅で引き取ることが難しいなどの事情を抱えており、決壊による負傷者対応もある中、地域の受け入れ病院等の調整に 1 日を要する結果となった。
19:20	PWJ の医師とともに内服薬がなくて困っている古里小学校体育館避難所、古里総合市民センターを訪ねた。古里小学校体育館では、キャンパスの派遣看護師が 1 名おり、傾聴や夜間待機にあっていた。内服薬を忘れた家族によると、未明の浸水で着の身着のまま逃げてきたので何も持ち出せなかった、家がどうなっているかもわからない状態だという。両避難所の避難所アセスメントをシートに沿って行い、集会室にいた避難者 2 家族から困っていることなどを聞き取った。20:00 を過ぎた時点で高齢者は古里総合市民センターの和室に明かりをつけたまま雑魚寝しており、照明や空調には問題はないが、和室内がやや過密であることが気になった。
20:30	市民総合センターの市役所担当者および児童館館長より聞き取りを終え、ほかの避難所の場所を聞き取りで可能な限り収集し活動を終了する。

3. 課題・所感

近隣の千曲川決壊と聞いてすぐに飛び出したため、被害の場所や程度も不明なままにまず孤立した医療機関を目指して出動した。そのため、避難者を多く収容する避難所には本日中には行きつけなかった。広範囲にわたる被害が十分予想され広域での避難者数が多いことと、避難生活の長期化が考えられる。県や市の対策本部では、行方不明者や浸水して孤立した被災者の救援を最優先にしており、医療面での対応を統括・調整する部門を明日以降、情報収集し、救助された方々の収容先や避難者の対応も同時に進めていかねばならない。また、浸水した病院等はまだいくつあるとの情報があり、インフラの停止により

通信が不可能となっているという。全貌が明らかになるにつれ、被害が拡大、対応も多様化することが考えられるため、外部支援者としてどのようなニーズに優先的に対応すべきか、状況をつぶさに観察しながら現地の事情と合わせて進めていく必要がある。また、浸水して機能不全となった医療施設は非常電源も落ちてしまい、徐々に日が暮れて施設内が真っ暗になる中、固定電話も通じず、高齢化し障害を持った患者様の受け入れ先もなかなか決まらなかった。広域災害の急性期で、外部が患者の全員脱出等搬送をどの程度の緊急度を持って対応してくれているのか、全くわからないもどかしさを感じ、寒冷期に入りこのような広域、大規模な災害においては収容患者様の命にもかかわる非常事態になることを身を持って実感した。